

保育者養成課程 (T 短期大学 K 学科) 独自科目「専攻演習Ⅱ」 (2020 年度) における授業実践の実際に関する一考察

永井 理恵子・近藤 万里子・若原 真由子・五十嵐 元子・三島 秀晃

帝京短期大学 こども教育学科

【抄録】

【問題・目的】 本報告は、2020 年度の新設科目「専攻演習Ⅱ A・B」(オムニバス科目) において実施された授業の全体を、各授業を担当した教員が夫々の授業目的と内容を示すこと及び、全体をとおしての授業構成と科目目的を示すことによって明らかにし、これにより当該授業の成果を探り、今後の同科目運営の資として寄与することを目的とする。

【方法】 前期 A15 回、後期 B15 回を担当した教員が、夫々の授業の目的と内容および方法を述べるとともに、その成果を省察する。実際の授業においてはレスポンスシートによって学生の達成度を測定したが、本報告の研究には参考として用いるに留めた。

【結果】 各授業担当教員が担当回の省察を終了した後に対談し、授業の全体を振り返った。新設科目の初年度授業は担当教員の専門を生かした内容で多角的に構成されたが、全 30 回の授業を学んだ学生は翌 2021 年度の卒業研究においてその成果を十分に生かした多様な視点による研究に取り組むこととなり、本授業が学生への一定の定着を見たことが確認できた。

【考察】 全 30 回の授業内容を見ると、約半数の 14 回が、教職課程に定められた内容としては人物の名称と代表的な業績を知る程度(高等学校までの教科内で指導されてはいるものの殆ど記憶に残っていない人物および主な業績を含む)である事柄を更に深く学ぶ内容となっていた。そうした授業は一部の学生には難易度が高く、興味が持てない内容もある一方、予想外に多くの学生がしっかりと学習に取り組んだことが、レスポンスシートの記述および 2021 年度に学生が選択した研究テーマの内容から十分に読み取ることができた。学生は、教員がイメージしたよりも学習意欲が高く、期待に十分に答える学習を示すことが確認できた。こうした学生の興味関心を伸ばすべく、専門性の高い内容を楽しく学べる授業構築を、今後とも学科を挙げて継続していくものとする。

【キーワード】 保育者としての専門的知識、新設科目、学習成果

I. 問題・目的

帝京短期大学こども教育学科では、2019 年度の教職課程再認定によるカリキュラム改編に伴い、学科独自科目として「専攻演習」を設けた。同科目は本学本学科本科 1 年においては「専攻演習Ⅰ」、同 2 年において「専攻演習Ⅱ」、本学科専攻科において「専攻演習Ⅲ」と銘打たれてⅠ～Ⅲの 3 年間にわたって設置され、更に前期・後期を夫々「A」「B」とした全 6 科目構成で成立している。

この「専攻演習」は、広く「保育者としての知識、技術、人格(礼儀・努力・誠実: 本学「建学の精神」に拠る)」の修得を目指すことを目的

として設置された。より詳しく述べると、幼稚園教諭免許および保育士資格取得のための専門教育科目の授業内で教授される内容の枠に収まらないものの、保育者として必要と考えられる専門知識を幅広く修得することを目的としている科目である。保育者の基礎知識として知っていることが求められる内容や、教職課程に定められた授業の内容を超えて少々高度である内容、より専門性の高い内容などを学習することができる授業であるとともに、保育者としての一般教養の学修といった色彩も帯びている。本学科本科における開講の「専攻演習Ⅰ」「専攻演習Ⅱ」で、専門教育科目に関連する多様な内容を教授することを目指し、続く本学科専攻科設置の「専

攻演習Ⅲ」では、専門教育科目および「専攻演習」Ⅰ・Ⅱでの学習を基礎に、各自で興味関心のある課題を設定し研究をおこなって報告書を作成することを最終目的とする。

同科目は2019年度より導入された新カリキュラム科目であるため、2019年度は「専攻演習Ⅰ」のみの開講であり、2020年度は「専攻演習Ⅰ」と「専攻演習Ⅱ」が開講された。ちなみに「専攻演習Ⅲ」は2021年度が初開講となっている。本報告は、これらのうち、開設2年目にあたる2020年度開講「専攻演習Ⅱ」A・Bの実践報告である。

「専攻演習」では、こうした目的の下、年度ごとに担当を任された教員陣の研究領域を生かして具体的な授業内容が構築されるわけだが、2020年度「専攻演習Ⅱ」は、教育原理・教育史・領域「環境」を専門とする教員（永井理恵子）、領域「言葉」・特別支援教育を専門とする教員（近藤万里子）、楽器演奏および音楽教育を専門とする教員（若原真由子）の3名を中心に、ゲスト教員2名の計5名が担当した。そのため2020年度同科目は、これらの教員が専門とする内容を採り入れて構成された。

本報告は、2020年度「専攻演習Ⅱ」A・Bにおいて実施された授業の内容の一覧を紹介するとともに、各回を主担当した教員が夫々担当した授業内容の実施意図・目的を述べる。そして最終的に、その授業が果たした意義について各担当教員が述べ、授業全体の意義と役割について再考し、今後の資とすることを最終目的とする。

なお、本授業では、学生からのレポートやレスポンスシート（対面授業終了後に学生に記述させる授業感想文、ないしは質問用紙）を毎回収集し、成績評価の資とした。しかし、本報告書を書く時点では全てが学生に返却されて、ごく一部の複写しか手元に保存されておらず、複写が残っているものも既に卒業している学生がいて本報告書掲載の許可が取れないため、ここに学生の成果事例を示して紹介することができないことを断っておきたい。

ちなみに2020年度前期開講の本授業はコロナ禍により第13回まで紙ベースの通信型授業が運営されていたため、授業内容・方法ともに紙ベース授業運営に適したものに改編して実施された。この間の本学科における授業運営については別

稿にて詳細な紹介がおこなわれているため、ここでは記載しない。（文責：永井）

Ⅱ. 方法

実践された全30回（前期A15回、後期B15回）の授業内容を紹介し、一部学生のレスポンスシート内容も紹介しつつ、その内容を検討する。（文責：永井）

Ⅲ. 結果

1. 「専攻演習Ⅱ」の内容

最初に、「専攻演習Ⅱ」A・Bの内容と担当者について一覧する。

(1) 「専攻演習Ⅱ A」(2020年度・前期)

この期はコロナ禍により、全15回のうち13回を通信型授業として、紙ベースのいわゆる伝統的な通信課程教育の形態を採って実施された。対面で実施されたのは14、15回の2回のみである。カッコ内は担当した教員である（苗字のみ表記）。

第1回 ガイダンス。授業の目的、内容、運営について学ぶ（永井）

第2回 幼児教育でおこなわれる季節行事について学ぶ：イースター（永井）

第3回 幼児の社会教育施設について学ぶ：葛西臨海水族園（永井）

第4回 自己省察（永井）

第5回 「建学の精神」の学習と、振り返り（近藤）

第6回 近代西洋音楽における古典派作曲家の学習と鑑賞：モーツァルト（若原）

第7回 電化製品を使用しない清掃の実践と報告：ダスキン方式ほか（永井）

第8回 6月の生活環境の調べ学習：季節を見つけて調べる（永井）

第9回 専門書購読①：ヴィトゲンシュタイン（近藤）

第10回 童謡・唱歌の音楽史と鑑賞：北原白秋作詞の童謡の鑑賞など（若原）

第11回 専門書購読②：土川五郎（永井）

第12回 児童文学を読む：『ももいろのきりん』（近藤）

第13回 日本の伝統音楽について学ぶ：少数

民族の音楽（若原）

第14回 フレーベルの幼児教育思想について学ぶ（永井）

第15回 明治期の児童福祉事業について学ぶ：石井十次（永井）

本来、大学における対面授業であれば、グループ活動をとおして実践的に学ぶ内容も多くあったが、今年度に関しては第13回までは各自が自宅で実践したり鑑賞したりして報告書を提出する形式を採った。

(2) 続けて「専攻演習Ⅱ B」について一覧する。

「専攻演習Ⅱ B」（2020年度・後期）

後期は、本学では通信授業をおこなわず、全て対面授業を実施した。

第1回 ガイダンス（永井）

第2回 身体表現をおこなう：「ソーシャルディスタンスを踏まえた身体表現～座ってできる、わらべ歌～」(ゲスト三島)

第3回 日本教育史①：近世における教育を学ぶ（永井）

第4回 自己理解を深める：「モラル・ジレンマ～道徳性の発達を知る」(ゲスト五十嵐)

第5回 「専攻演習Ⅲ」の予備学習：専攻科学生の研究発表を聴く（永井）

第6回 日本教育史②：近代における教育を学ぶ（永井）

第7回 日本の伝統音楽について学ぶ：琉球音楽（若原）

第8回 教育実習の個別事前指導（永井）

第9回 音楽を使った身体表現について：リトミック（若原）

第10回 近代（大正期）の童謡について学ぶ：滝廉太郎と山田耕筰（若原）

第11回 西洋音楽史における著名な作曲家について学ぶ：バイエルなど（若原）

第12回 「専攻演習Ⅲ」の予備学習：新聞記事分析（動物園・水族館の存在意義）（永井）

第13回 SSTの理論・実践（1）（近藤）

第14回 SSTの理論・実践（2）（近藤）

第15回 「専攻演習Ⅱ B」全体の振り返り、およびSDGsについて学ぶ（永井）

2. では、各担当教員が、それぞれの授業の内容と、その役割、指導の意図・ねらいについて述べる。（文責：永井）

2. 各授業の内容およびその役割、指導の意図とねらい、学習成果など

2. では、①各授業の内容およびその役割、指導の意図とねらい、②学習の内容、③学習成果などを、各担当者が分担執筆する。なお、ここでは、例えば前期の第2回の授業は「A2」、後期の第3回は「B3」というように表記する。

1) 永井理恵子担当回（A1, 2, 3, 4, 7, 8, 11, 14, 15, :B1, 3, 5, 6, 8, 12, 15）（文責：永井）

2) 近藤万里子担当回（A5, 9, 12, :B13, 14）（文責：近藤）

3) 若原真由子担当回（A6, 10, 13, :B7, 9, 10, 11）（文責：若原）

4) 三島秀晃担当回（ゲスト教員）担当回（B2）（文責：三島）

5) 五十嵐元子担当回（ゲスト教員）担当回（B4）（文責：五十嵐）

(1) 永井理恵子担当回

A1 「専攻演習Ⅱ A」についてのガイダンス

初回である今回は、「専攻演習Ⅱ A」における授業の目的と内容について確認をおこなった。本授業は、本学「建学の精神」の基盤の上に、保育者としての知識、技術、人格の調和的な修得を目指すことを目的として、保育者に求められる幅広い知識と教養を養うことを期するものである。具体的には各担当教員の専門領域における知識と教養の養成に加え、専門書購読、本学と法人を一とする帝京めぐみ幼稚園での参加実習、学外活動（地域清掃や社会教育施設の体験学習）等が当初予定されていたが、これらのうち参加実習と学外活動はコロナ禍により中止され、他の授業内容に変更されることとなった。以上の点についての説明をおこなった。

A2 幼児教育でおこなわれる季節行事について学ぶ：イースター

本学では、幼稚園・保育所等で実施される様々な季節行事について、その起源や由来について確りと学ぶ活動を、「専攻演習」において採り入れている。今日の乳幼児教育・保育の場においては、七夕や豆まきなどの伝統的な季節行事のみならず、クリスマスやハロウィーンなど外来の季節行事も多く実施されるようになった。こうした行事に関わる歌や製作などの活動内容については養成校で学ぶことが多いと思われるが、本学ではそうした活動内容だけでなく、その季

節行事の起源や由来，一般社会での行事のありかたなどを含めて包括的に学び，教養ある保育者を育成することを目指している。「専攻演習Ⅰ」において既に「七夕」「ハロウィーン」「クリスマス」についての基礎的学習と製作実習を終了しており，「専攻演習Ⅱ」における季節行事の学習として「イースター」を採り上げた。

「イースター」は，近年になって急速に日本社会において広く展開されるようになったもので，某テーマパークなどでもイベントが開催されている。幼稚園や保育所においても，その装飾をおこなったり，エッグアートをおこなったりしている事例も散見されるようになった。しかし，「イースター」と言えばウサギとたまご，程度しか認識がない学生が殆どである実態から，「専攻演習Ⅱ」において，この行事の「調べ学習」をおこなった。

学生は，各自インターネットや文献を用いて「イースター」について調べ，紙ベースのレポートを作成して大学に提出した。対面授業が実施できればエッグアートなどの実践を実施する予定であったが，エッグアートには食紅などの特殊な材料が必要であるため家庭で各自で実施させることができなかつたのが残念である。

A3 幼児の社会教育施設について学ぶ：葛西臨海水族園

幼稚園・保育所等では園外教育・保育活動として，様々な社会教育施設に出かける。出かける先は緑化センター，緑地，プラネタリウム，消防署や空港や郵便局など多岐に亘るが，それらのなかに生物を見る「動物園」「水族館」がある。小動物を自ら飼育したり，園庭にやってくる昆虫を見て楽しむことは，地球上に共存する多種多様な生物に親しみをもつ第一歩として不可欠である。それと同時に，日常生活ではなかなか見ることのできない生物の生きる姿を直接に見たり触れたりすることも，広く地球上の生物を愛し，その保護を考えるように成長する過程において欠かせない体験である。こうした体験を保育者や仲間とともに，幼児期において経験しておくことは，のちに生物に対する愛着を抱いたり，興味関心をもつようになる入口として重要である。

こうした観点から本学では，授業の一環として，将来保育者になる学生たちにも生物に直接触れる経験をさせると共に，自らが保育者となっ

たときにどのような活動を計画することができるかについても考える機会を用意している。本科一年次においては「専攻演習」ではない演習科目「こども演習」において，事前学習をおこなったうえで多摩動物公園に出向き，陸の生物について教員とともに学び，実際の姿に触れる学習をおこなった。二年次では「専攻演習Ⅱ A」において葛西臨海水族園に出かけ，水生の生物について同様の学習をおこなう予定であった。実際にはコロナ禍により出向くことが不可能となったので，この授業においては各自で葛西臨海水族園のホームページを訪問し，バーチャルで訪問して報告書を作成した。学生は，同水族園の特徴と飼育している生物についての調べ学習とともに，実際に年長児を引率することを想定しての事前活動と現地プログラム，園に戻ってからの活動についてイメージ化し，いずれもレポートにして提出した。

学習成果としては，実際に水族園で実施している教育プログラムを体験することができず，各自が家庭でプログラムを作成するという自習の難易度が高かったため，十分な学習が達成されたとは言い難い結果に留まった。とはいえ，一定時間をホームページと向き合い，水生生物に関する知識を修得し，水族館の機能や役割について学ぶことができた点においては，一定の効果があったと考えられる。

A4 自己省察

本来，大学では，前期・後期に各一回ずつ担任面談を実施することになっている。しかし，コロナ禍により対面が不可能となったため，各担任はオンラインをとおして学生面談を実施した。その一方で，この授業において自らの現在を自分で振り返って文章に書き，自己省察を図った。

第4回では主に，養成校に入学して1年が経ち，幼稚園教育実習も体験した今，保育者としての適性を含めて今後どのような学びを進めることが必要なのかについて紙に書き，提出した。自分の課題を紙に書いて表出するという作業をとおして，自己の現在を確りと見つめ直すことが出来たのではないかと考えられる。

A5 「建学の精神」の学習と，振り返り

この回の授業は，A4に引き続き，担任面談の実施内容を通信型課題として行った。「建学の精神」については本学では毎年初回の担任面談の

際に、学生が担任に対して述べることで確認を行っている。この確認作業は、口頭で述べることにより学生にとって入学時の初心を思い出す機会となっていると考える。しかし、コロナ渦のため、今回は書く作業を通しての確認となった。

また、今年度、新任教員が担任となったことから、振り返りではなく自己紹介を提出してもらった。前回の授業の自己省察に続き、自己の得手・不得手や興味関心等、自己理解を深めることへ繋がったと考えられる。

A7 電化製品を使用しない清掃の実践と報告：ダスキンを参考に

本学では、地域貢献活動の一環として、且つ幼稚園・保育所における日々の仕事として必須でもある「清掃」を各学期に一回、実施している。対面授業がおこなわれている場合には、学生を2班に分け、一方が学外清掃、もう一方が学内清掃を実施しているが、今年度は各家庭で、各自で工夫して身の回りを清掃することを学習として位置づけた。この課題を出すに当たっては、掃除機を使用しないことを前提とし、「ほうきとチリトリ」を用いた掃き掃除、「バケツと雑巾」を用いた拭き掃除を基本に、各家庭によって必要な水掃除、薬品掃除も適宜可として、各自の環境に応じて掃除をおこなうよう指示した。ほうきとチリトリ、雑巾の使用法については、株式会社ダスキンがホームページ上で公開している「われらクリーン調査隊」授業案を印刷して送付し、これを参考に正しい道具の使用法を学習したうえで掃除活動を実施するように指示した。

学生は、各自の家庭環境に応じて家族と相談するなどして掃除の場所と内容を決め、掃除をして、掃除の実際と工夫点等をレポートに書いて提出した。

レポートからは、学生が様々な工夫をして掃除に当たったこと、きちんと掃除をしようとすると意外と難しいこと、掃除の行き届いた環境は快適であること、掃除をしたことによって家族に喜ばれたこと等が見て取れた。この授業内容に関しては、大学で実施するよりも寧ろ却って効果を奏したのではないかと判断された。

A8 6月の生活環境の調べ学習：季節を見つけて調べて報告する

乳幼児教育・保育場面では、季節感ある保育

内容の構築が不可欠である。ひとくちに「季節」と言っても、自然現象そのものに関わる事項もあれば、自然現象に伴い生じた社会生活に見える事項もある。日本は四季おりおりの変化が顕著な国であるが、学生のなかには季節の変化に対する気づきが顕著でない者も見受けられる。この点から本授業は、幼児教育・保育場面で十分な認識が不可欠である「季節」の姿について目を向けるものとして計画された。

課題としては、6月に見られる「花」「梅雨」「昆虫など」「食物（野菜、果物、魚など）」や、季節の行事「衣替え」「菓子」、イベント「歯の衛生週間」「時の記念日」などを提示し、これらのなかから、ないしは自分で思いついた「6月」の生活環境について一つを選び、調べ学習およびレポートや製作物の提出、ないしは絵などでの表現をしたものの提出をおこなう課題を提示した。

この課題に対しては、やはり目につきやすい「花」「野菜」「虫」といった具体物についての調べ学習のレポート提出や、描画表現したものの提出が多くを占めていた。幼稚園・保育所の活動として必ず登場する「歯の衛生週間」「時の記念日」に関する調べ学習およびレポートや製作物の提出は1例も見られなかった。すなわち、大学生にとって「歯の衛生週間」「時の記念日」といった社会的行事は身近なものとして捉えられていないことが明らかとなった。こうした社会的行事に関わる保育内容・活動は大学生にとってさえ身近でないものであるから、幼稚園・保育所における実践活動に関しては養成校に在学しているあいだに演習等をとおして実践してみることが求められると考えられる。

A11 専門書購読②：土川五郎（つちかわごろう）

この回は、明治末期から大正初期にかけて活躍した「遊戯」の研究者である土川五郎（1871～1947）の著書の購読である。土川は、明治期の日本において幼児の生活や実際の姿にそぐわない「遊戯」が行われていたことに異議を述べ、独自の「遊戯」を開発した人物である。土川が創造した「遊戯」が今日の「お遊戯」の原型となっているが、こうした人物が現代の遊戯を考案したことを学ぶ機会がないため、「専攻演習ⅡA」において導入した。

学生には土川の論文「子供と遊戯」（『子供研

究大系 第8巻』日本両親再教育協会編，先進社，1931）の冒頭部分抜粋を配布した。これと共に，内容の簡単な要約も添付した。土川は，幼児にとっての「遊び」は大人の「遊び」とは全く異なり，幼児の「遊び」はそれ自体が重要な目的をもっていると述べる。そうであるからこそ，「遊戯」も「遊び」の一つとして幼児にとって理解でき，楽しんで表現できるものでなくてはならないと述べている。これを紹介し，これに対する感想を書いて提出させた。

提出されたレポートは，いずれも土川の意を十分に汲んだものであったが，あくまで永井による補助説明を読んだレポートである。対面授業であればグループになって意見交換を踏まえてのレポート執筆が可能であったわけだが，自宅自習であるため，永井の補助説明のコピー的なレポートが多く見られた。しかし，これはやむを得ないことと捉えたい。学生が土川五郎の文に直に接したという経験は，音楽表現の学習において有意なものであった。

A14 フレーベルの幼児教育思想について学ぶ（対面授業）

フレーベル（Friedrich Fröbel，1782～1852）は，世界で最初の幼稚園を創設したとともに，初めての玩具「恩物」（gabe）を考案した人物である。フレーベルは「教育原理」「保育原理」ほかの授業で何度も登場する著名人であるが，本「専攻演習Ⅱ」においては，それらの授業における基礎的知識の上に，更に専門的な高度な知識を得ることを目的として計画されている。なお，第14回からは対面授業が開始されたため，実物を見せること，動画を視せることが可能となった。

本授業では，「恩物」の実物を見せながら説明したとともに，フレーベルの独自の理論である「衝動」（der Trieb）概念について講義をおこなうとともに，動画を視聴した。全て人間は内的衝動によって動かされて創造するというフレーベルの人間理解が幼児教育に応用され，幼児は大人に増して「衝動」が強いため，「衝動」を引き出す「環境」を準備するだけで幼児は自ら活動し成長していくとフレーベルは考えた。

授業終了後のレスポンスシートには，「フレーベルの深い考えがわかって良かった」「恩物が見られて良かった」などの意見が見られた。難しい内容であったため全ての学生が十分に理解でき

たわけではないが，一度は耳にし目にしておくことが，将来なにかの折に役立つ可能性に期待したいものである。

A15 明治期の児童福祉事業について学ぶ：石井十次（対面授業）

今回は，明治期の児童福祉事業家として知られる石井十次（1865～1914）に関する動画を視聴し，その内容の理解と感想をレスポンスシートに記述した。

石井十次は明治期の岡山において岡山孤児院を創立した児童福祉事業家である。キリスト教に入信した後に岡山県医学校に通っていたが，出会った孤児に感化されて医学の道を捨て孤児院の創立・運営に尽力した人物である。近代日本児童福祉史に名を遺す著名人であるが，児童福祉に関する授業内では，その人となり十分に触れることは時間的制約から難しいため，「専攻演習Ⅱ」において深く接する機会を設けた。

レスポンスシートには，石井十次を一人の人として捉え，その働きについて敬意を抱いた学生の姿が多く示されており，この授業の学習成果を明らかに認めることができた。

B1 専攻演習Ⅱ A）についてのガイダンス

初回である今回は，「専攻演習Ⅱ B」における授業の目的と内容について確認をおこなった。本授業は，前期開講Ⅱ A 同様，本学「建学の精神」の基盤の上に，保育者としての知識，技術，人格の調和的な修得を目指すことを目的として，保育者に求められる幅広い知識と教養を養うことを期するものである。具体的には前期Ⅱ A 同様，各担当教員の専門領域における知識と教養の養成を基盤としつつ，いっそう高度で専門的な内容に取り組むことを確認した。

B3 日本教育史①：近世における教育を学ぶ

本授業では，『教育の歴史と思想』（石村章代他編著，ミネルヴァ書房 2013）の一部をテキストとして，江戸期の子育て思想と，藩校や寺子屋といった教育機関の種類とそこにおける教育の内容・方法について学習した。本学においては教育史の授業が日本・西洋ともに設けられておらず，「教育原理」の限られた時間内で日本近世・近代教育史を学習する機会のみである。そこで本授業では，ごく限定的な内容ではあるものの，保育者の基礎教養として必須と考えられる程度の近世教育についての学習をおこなった。学習においては当時の寺子屋や藩校の絵図

などを用いて、視覚的にも楽しんで学習できるよう工夫した。

授業後のレスポンス・シートは、この内容へのどの程度、理解し吸収しているかを検討する材料として判断したが、予想を遥かに超える理解をしているものが大半を占めていた。

B5 「専攻演習Ⅲ」の予備学習：専攻科学生の研究発表を聴く

本学は本科2年を卒業後、多くの学生が専攻科に進学する。「専攻演習」は、本科1年で「専攻演習Ⅰ」、本科2年で「専攻演習Ⅱ」を履修し、専攻科において「専攻演習Ⅲ」を履修することが、夫々卒業必修・修了必修条件となっている。「専攻演習Ⅰ」「専攻演習Ⅱ」においては、本科目の目的に基づき多様な学習を深めていくわけだが、「専攻演習Ⅲ」においては本学こども教育学科における学習の集大成として、各自が興味関心をもつ主題を決めて研究し報告書にまとめることをおこなう。今回のB5の授業では、その前哨戦として、現在、専攻科で報告書を執筆中の専攻科生を招き、中間報告をしてもらい、それを聴くことをおこなった。

専攻科の学生たち5名は、各自の研究題目のもとに、研究課題、研究を始めた契機、研究の方法目的、方法、現在までの研究の進捗状況を各自10分程度でまとめて発表した。学生たちはそれを聴き、感想を書いて提出した。

この授業は可能であれば、学生を班に分け、それぞれの班に専攻科生を1名ずつ配置し、自由な話し合いや質疑応答をする学習形態を実施したいと考えていたが、新型コロナウイルス感染症対策として実施せず、発表を聴いて感想を書く形式を採らざるを得なかった。

B6 日本教育史②：近代における教育を学ぶ

B3回に続く第二回として、日本近代における教育について、同じく『教育の歴史と思想』の一部をテキストとして、開国、維新に伴って導入された近代学校教育の燭光について学習した。内容としては、黒船来航と開国、『学問のすゝめ』に見られる新しい人権思想と教育思想、「学制」頒布、公教育としての学校の誕生、西洋式「時間」概念の導入などについて、保育者の基礎教養として必須と考えられる程度の初期近代教育についての学習をおこなった。①回同様、黒船来航、近代学校の校舎や室内環境設定など、多くの絵図を用いて興味を持って学習できるよう

に工夫した。「教育原理」その他の授業において近代日本の幼稚園教育導入期については学習する機会があるが、広く且つ基礎としての近代教育の導入については本学科では学習できない機会がないため、その補いとして学習内容を設定した。

この回におけるレスポンスシートもB3回と同様に、非常に濃密な内容が記述されており、学生の吸収力に目を見張るものがあった。

B3, B6は、いわゆる一斉学習形態で、しかも一般に学生に興味関心をもたれにくい教育史の授業であったが、B15回で実施した全15回のⅡB全体の振り返りレスポンスシートのなかに、B3, B6に対して書かれた以下のようなコメントも見られた(概略)。

「高校では世界史を選択していたので、日本史について学ぶことが少なかったのととても勉強になった。ただ日本史について学ぶだけでなく、日本の教育の歴史について学び、それをレスポンスシートに毎回書くことによって、自分でまとめることの大切さや、後で見返して改めて見れて学ぶことができるのでよかった。」

「日本の教育の歴史について興味を持つことができました。恩物がどのように伝わってきたのか、どのようにして教育に使われてきたのかなどを知り、歴史が面白いなと感じました。どのような歴史があって現代に受け継がれてきたのかももっと詳しく勉強したいなと思いました。」

「今に至るまでの百五十年余のあいだで大きく変化したなと感じた。西洋文化を一八五四年から取り入れ、保育界もその波に乗り様々な保育思想が出てきてそれが今にも受け継がれていくことはすごいと思った。」

多くの学生ではなかったが、教育史を学んで感じたことを全15回の学習内容のなかから選択して記述した学生が僅かでもいたことに驚かされた。

日本教育史①②は、其々の回のレスポンスシート、およびB15回における全体ふりかえりシートのいずれにおいても、学生が予想以上に教育史を吸収する力があることや、興味関心をもつ土壌が内包されていることが明らかとなった。カリキュラムにおいて教育史に係る授業が設けられていないことは残念であるが、こうした需要があることが確認できたので、今後も機会をみて教育史を伝授していきたいと考え

る。現代の教育を考えるうえで歴史を知っておき、その時系列のなかに現代を位置づけて将来像を描く力を修得することは、保育者の重要な力量形成の一端となろう。

B8 教育実習の個別事前指導

今回は、この直後に実施される教育実習の事前指導に充てたため、授業は実施していない。

B12 「専攻演習Ⅲ」の予備学習：新聞記事分析（動物園・水族館の存在意義）

この回は、「専攻演習Ⅲ」でおこなう研究の予備学習として、新聞記事を読んで様々な見解を知り、それを整理し、それに対する自分の意見をまとめるという、課題意識をもって対象に接近する練習をおこなった。

用いたのは朝日新聞記事「動物園，どう思う？」（2020年11月1日（日），8日（日）2回連載）である。これを読み、動物園（水族館を含む）に対する動物園学や動物学の研究者、動物園や水族館の関係者、一般の人々の様々な見解に触れ、その是非について自分なりに考えてレスポンスシートに記入するという活動をおこなった。

動物園・水族館は、幼児教育場面において不可避な社会的環境の一つであり、将来、保育者になったときに必ず子どもたちとともに出かける施設である。また、幼児期における動物に対する愛着形成の重要性を考えた時、保育者としての視点から教育学的に動物園の役割を見出す力が求められる。このような意義をもつ「動物園」の是非について述べた新聞記事を教材として、基礎的研究力の育成を図ったのが、この授業であった。授業では新聞記事をもとに各自その場でスマートフォンを使用して各自の興味関心や問題意識に沿って調べ学習を深め、各自の観点から小レポートを作成してレスポンスシートにまとめた。

「動物園（水族館）」という、学生たちにとって身近で、しかも多くの学生が好きであると答えた場所に関する記事を教材として用いたため、学生の取り組みは非常に熱意に満ちており、いた。B15回で実施した全体レスポンスシートでも今回のテーマについて記述した学生が12名もおり、課題意識の明白さを示していた。最終レスポンスシートでは、「動物園の役割を知ることができてよかった」という意見が多く見られたが、なかでも「自分の視点だけではなく、他の

人からの視点で楽しみかたが変わっていることに気付きました」という一文に、本授業の実施意義が明らかに確認できた。すなわち、自分自身の観点だけではなく他者の観点を知ることによって、対象物の見え方が変化したり拡大したりしていくのだということを掴んだ学生がいたことは、研究という業の役割を少しでも感じてもらえることが出来たといえよう。今回の授業は大変に効果的であったため、「専攻演習Ⅲ」の開始時期にも他の記事を用いて同様の授業を実践し、学生の研究眼の育成に役立てたいと考える。

B15 「専攻演習Ⅱ B」全体の振り返り、およびSDGsについて学ぶ

最終回では、これまで実質12回の授業内容を総合的に振り返った。教員のほうから一回ごとの活動内容を話し、夫々の回で何を学んで欲しかったかを、その成果とともに学生に伝えた。そのうえで最後のレスポンスシートを配布し、これまでの授業のなかで印象に残っている内容を自由に記述させた。

これに加えて、最終回の学習として、包括的に生活環境を振り返ることのできるSDGsをテーマに採り上げた。現代の社会的な取り組みとして広く知られるSDGsであるが、なかには全く知らない学生もおり、最も近い学問領域にある領域「環境」において教授する必要性を改めて感じさせられた。本授業においてはSDGsについて、その基礎概念を教授したのち、学生たちは各自のスマートフォンを用いて身の回りのSDGs活動について調査し、これをシートに記入した。併せて学生たちは、これからの生活において自分自身が、そして幼児教育場面で幼児とともに実践できることについて考察し、同じくシートに記述した。

SDGsについては、今後の専攻演習においても折に触れて学習課題に導入し、一個人として環境に寄与できることについて考える機会をもつことが必須である。

(2) 近藤万里子担当回

A9 専門書購読①：ヴィトゲンシュタイン

ルートヴィヒ・ヨーゼフ・ヨーハン・ヴィトゲンシュタイン（Ludwig Josef Johann Wittgenstein:1889～1951）はオーストリア出身の哲学者である。彼の数々の偉業は分析哲学や言語哲学に大きな影響を与え、彼を20世紀最大の

哲学者の一人と成した。ヴィトゲンシュタインの著書には、子どもに言葉を教えることについて探求した内容も多く、保育者養成の学生には一度は触れておいて欲しいという教員の思いから本授業のテーマとして扱うこととした。しかしながら、日本の小中高の教育課程に哲学は設置されていないため、本校含むわが国の学生にとって哲学とは馴染なく難解な印象を与えるものとなっていることが推測される。そこで、本授業においては、哲学が学生の実体験と結びつき、体験を想起することで哲学の理解を促せるよう工夫を行い、学生に哲学に馴染んでもらえるような内容を設定した。学生には、ヴィトゲンシュタインの一節とそれについての解説を読み、次にそれに類似した体験を保育に関わる実習体験やボランティア体験から想起し、その体験を述べてもらった。

学習成果の課題として、学生の体験を綴ってもらったレポートから、文章による解説のみでは学生の理解が不十分であることが考えられた。しかし、学生の中には、難解な文章の一節が実は身近な体験と結びつくということが分かり面白かったという感想もあり、哲学に触れる一歩となったのではないかと考える。

A12 児童文学を読む：『ももいろのきりん』

児童文学『ももいろのきりん』（福音館書店出版 1965）は、絵本『ぐりとぐら』で知られる中川李枝子の作品である。学生は実習園での読み聞かせ等で絵本には親しんでいるものの、絵本から文学への橋渡しとなる児童文学に触れる機会は少ない。そのため、卒園した子どもたちが次の段階で手に取る児童文学を本授業内容に組み込んだ。文芸作品を読む学習においては、内容を読み解く、感想を書くといった活動が主となる。しかし、幼少期を思い出しながら読む体験からの学習の方が子どもと関わる保育学生には適切であると考え、今回は、本作品から想像を広げる活動を行った。「おしまい」の言葉で絵本が閉じられても子どもたちの絵本の世界はそれで終了ではない。読み終わった後も、味わった世界の景色や登場人物は子どもたちの心を占めている。そして、時には読んでもらった物語の模倣を超え、物語に書かれていない部分も子どもの想像力によって補完ないし拡大され、ごっこ遊びやお絵かき等で表現されることもある。

学生には『ももいろのきりん』の作品の一部

を書き換えて独自の作品とする課題を出した。『ももいろのきりん』は、主人公の女の子が一枚の桃色の紙にハサミを入れキリンの形にすると、切られたキリンが本物のキリンのように動き出すという内容である。学生には、主人公を自分に置き換え、好きな色の紙で物語を書き始める課題を与えた。挿絵を自分で描く等の工夫をし、学生の数だけの個性豊かな作品が輩出された。

B13 SSTの理論・実践（1）

SST（Social Skills Training: ソーシャルスキルトレーニング）について13回目授業前半を理論、授業後半を実践として教授を行った。当初、理論と実践は別日を予定していたが、感染の拡大により14回目の授業の対面授業開催が危ぶまれたためである。

SSTとは社会参加のために人と関わっていく上でコミュニケーション等の必要な技術の習得のことである。主に発達障がい児・者等のコミュニケーション指導として用いられる。2015年に行われた保育協会の調査において、診断のある発達障がい児または「気になる子」と呼ばれる診断はされていないが行動面・発達面等において問題が見られる子どもは9割以上の保育所で見られていると報告されている（社会福祉法人 日本保育協会：2015）。卒業・修了後に発達障がいをもつ子どもの保育にあたる可能性は高い。よって、その指導方法を学んでおくことは有用であろう。

理論に基づき、この回では実践（1）としてボードゲームやカードゲームといった遊びを取り入れたSSTを体験した。SSTには身体を使ったものもあるが、授業内でできる内容として3~5人程度のグループでゲームを通しコミュニケーション能力を高めた。使用したゲームは「ナンジャモンジャ」「おにみち」「かずみち」「てがみち」「ほめたいやき」「人狼」「ヒットマンガ」「アンゲーム」「ベストアクト」である。「おにみち」「かずみち」「てがみち」には勝者が存在しない。ゲーム参加者が協力しながらゲームの中の困難を解決する。このような遊び体験から協同する力が育つのである。「人狼」は相手の表情や言い方等の表現に注目することが大切となる。「短所を長所に変えたいやき」は相手や自分の良いところを見つけるゲームである。子どもの良い点に目を向けられる力は保育者として必要な資質である。また先ほど述べた協同する力も保

育者同士、保護者や多職種との連携等、保育者として必要な力であろう。全てのゲームについて説明するには紙面が足りないため今回はここまでの紹介に留めたい。

B14 SST の実践 (2)

前回に引き続き SST の実践を行った。近年、自分の感情コントロールが苦手な学生が多々見受けられる。これは一朝一夕に会得できるものではない。乳幼児期からの周囲との関わりによって育てられるものである。今回は絵本を用い、感情コントロールの方法の学習を行った。絵本を用いる方法は、保育者となり子ども達と向き合う際にも役立つであろう。本授業では、アメリカの心理学者ドーン・ヒューブナー (Dawn Huebner) の著書「だいじょうぶ自分でできる怒りの消火法ワークブック イラスト版子どもの認知行動療法：2009年」、旺文社が手掛けた子ども向け実用書「学校では教えてくれない大切なこと (2) 友だち関係 (自分と仲良く)：2015年」の2冊を使用した。両書とも子どもが一人、または大人と一緒に読めるようになっており、子どもが楽しんで読めるような工夫がされている。ヒューブナーの書は、物語を読み進みながら出された課題に回答していくワーク形式になっている。旺文社の書は、直ぐにイライラする星人や、自分の気持ちを上手く伝えられなくて困っている子どもを登場させ、子どもが感情移入しやすい工夫をしている。学生はこれらの切り抜きを読み、①ワーク課題の回答、②自分の欠点を体現した「〇〇星人」の作成を行った。「〇〇星人」作成では、自分の欠点を一人のキャラクターとして表すことで視覚化し、明確化することがねらいである。さらに、「〇〇星人」の倒し方を考え、自己の欠点の克服方法を考える課題も加えた。キャラクターとして擬人化することで子どもにも理解しやすいため子どもと接する際にも用いたいといった意見が学生から聞かれた。

(3) 若原真由子担当回

A6 近代西洋音楽における古典派音楽の作曲家学習と鑑賞：モーツァルト

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (Wolfgang Amadeus Mozart, 1756~1791) は、古今の作曲家の中でもとりわけ高い知名度を持つ古典派の作曲家である。600曲を越えるモーツァルトの数々の作品は、クラシック音楽になじみ

のない聴き手にとってもクラシック音楽の入門として使われることの多い名曲が数多く存在する。

授業内容は、モーツァルトの生涯について見渡し、どの曲がどのような局面で作られたのかという学習を中心とした。通信教育の期間であったことから、指定の書誌を読ませ、その上でワークシートの問いに答えさせるという流れで進めた。また鑑賞教材として、「トルコ行進曲」を選んだ。これは「トルコ行進曲」は中学校音楽科の鑑賞教材としても取り上げられていることから、モーツァルトが作曲した作品の中でもより学生にとってなじみのある一曲であるとの認識によるものである。一般に、鑑賞の授業は苦手意識を持った学生が多いと言われている。そのため、イメージを膨らませやすくなるような「軽やかなリズム」「速い」「明るい」「楽しい」といったキーワードを載せることで、より無理なく感想を書く際の手引きとした。

ワークシートには、楽曲の特徴をよく捉え、イメージしたことが各学生なりの視点から記述されていた。更に、「保育者になった時にはモーツァルトの音楽を使いたい」という内容の感想があったことから、学生が保育者という立場による視点から、モーツァルトの音楽について一定程度の学びと理解を得ることができたものと思われる。

A10 童謡・唱歌の歴史学習と鑑賞：北原白秋作詞の童謡の鑑賞など

幼児教育において、幼児期の活動と童謡の歌唱は、切り離すことができないほど互いが密接に関連している。それはフレーベル (前出) が「表現としての芸術においては、音楽であり、主として歌唱である」と述べているところにも表れている。日本は世界的に見ても、子ども向けの曲が数多く作曲されており、歌唱教材に恵まれている環境にあると言える。それは、現在に至るまで日本の童謡が歌い継がれているのは、それだけ多くの作曲家による尽力ゆえに、そのような土壌が築かれたからに他ならない。よって、日本の童謡史を大局的に眺めてみることで、その進歩史観の理解の一助とできるのではないかとの考えから、この項目を取り上げた。

本授業はコロナ禍により、紙媒体教材による通信教育で行った。課題の内容は、童謡と唱歌を対象とし、その定義と発展史について触

れ、また鑑賞を行った。その鑑賞教材の1曲として、北原白秋(1885~1942)作詞・山田耕筰(1886~1965)作曲の「この道」を扱ったが、その理由として、この作品が北原白秋と山田耕筰のペアで作られた数曲あるうちの代表的な楽曲であり、現在では多くの中学・高等学校で扱う合唱曲としても親しまれていることが挙げられる。その他にも「ちょうちょう」や「はとぼっぼ」などを併せて取り上げたが、これらは保育で扱われる定番的な位置づけにあることがその理由として挙げられる。

学生は、自分たちが日常的に耳にすることの多いポピュラー音楽と比べ、現代では薄れてしまっている風情を童謡の曲中に見出すことができたことが確信された。また、童謡を歌ったり聴いたりする機会が少ない現代において、生活に密着した内容や、季節の行事を題材とするという、保育をする上で欠くことのできない、童謡の基本的な知識を学ぶ機会となったのではないかと考えられる。

A13 日本の伝統音楽について学ぶ：少数民族の音楽

近年、多様な背景を持つ子どもたちへの対応が求められている。それは人種、民族、宗教など多岐にわたっているだけに、一括りにはできないという前提を持っているものである。今回は民族について知る機会として、北海道の先住民族であるアイヌを選んで取り上げた。本学の学生にも自国の少数民族について知る契機づけの意味もあり、採用した次第である。

授業では、「ユカラ」「シントコ」などのアイヌ民謡の鑑賞や、アイヌの民族楽器「ムックリ」「トンコリ」について、楽器の構造や奏法に触れた。その際、民族問題はデリケートな側面を有していることもあり、民族に対する偏見や誤った認識につながらないように留意し、細心の注意を払い説明に努めた。

学生は、日本にこのような民族が存在することに驚いたり、また受け継がれてきた伝統音楽や文化の大切さに気づく機会になったように思われる。

B7 日本の伝統音楽について学ぶ：琉球音楽など

専攻演習ⅠAでアイヌの伝統音楽を扱った点と対置させる意味もあり、専攻演習ⅡBでは、日本の代表的な伝統音楽である雅楽や、古来か

ら伝承されてきている民族音楽である琉球音楽を取り上げた。日本の伝統音楽は、日本に居ながらにして却って触れる機会が少ないことなどにより、多くの人は自国の音楽にもかかわらず、「異文化」のように感じてしまうことも少なくない。これは、そのような多様化した現代にあっても、これから保育者となる学生には、日本の伝統を身近なものとして感じてもらいたいとの願いでもある。

私たちは、日本の音楽や琉球音楽を聴いた時、そこに自然と「日本らしさ」「沖縄らしさ」を感じることができる。これはひとえに、そこで使用されている「音階」ゆえであり、日本音階や琉球音階と呼ばれる独自の理論による音階が使われていることで、聴き手にそれらしさを感じさせるのである。授業内では音階の仕組みなどについて、理論的な内容ではあるものの、それを噛み砕いて触れつつ、雅楽や琉球音楽の歴史や民俗楽器の構造などについて解説した。

予想されたことではあったものの、授業では多くの学生が「日本の音楽はこれまであまり聴いたことがなかった」と回答した。また、理論的な内容は学生にとって難しい様子ではあったが、音楽的素地のある学生は興味深く受け止めたことが感想から読み取れた。

B9 音楽を使った身体表現について：リトミック

幼児教育によく取り入れられる音楽教育法のひとつに、エミール・ジャック＝ダルクローズ(Émile Jaques-Dalcroze, 1865~1950)が発案した「リトミック」がある。これは音に合わせて身体で自由に表現することにより、音楽的な基礎能力を築く教育方法である。リトミックは幼児教育と共通点が多いことから、現在では多くの教育機関で、このメソッドの目的であった「音楽家を育てること」を目的としない、幼児教育の一環として取り入れられるようになったという経緯がある。リトミックは、5領域の中でも特に「表現」領域が当てはまる。例えば、リトミック身体を使った表現活動であるため、「身体表現」に関連がある。加えて、リトミックでは手作りの教材を用いることが多く、制作活動は「造形表現」に該当する。このように、リトミックは音楽に留まらず、「表現」領域を網羅することができる表現活動と言える。この教育メソッドについて、ダルクローズが「教育者自身がこのメ

ソードを体験しなければならない」と述べていることもあり、これを体現すべく今回のプログラムとして導入した。しかし、現在のようなコロナ禍では、授業のあり方が制限を余儀なくされることから、どうしても動きを伴うことが多くなるリトミックは、活動として実施には難しさを含むことが明らかである。そこで、座った状態で、かつソーシャルディスタンスを保ちながらできるリトミックを実践することとした。

具体的な座ってできるリトミックとして、リズムカノン、即時反応、手遊びなどが挙げられる。これらの実践に際して、学生たちはリトミックの有効性に興味を持ったり、特に楽器の演奏経験がある学生の中では、これらを将来保育に導入したいとの考えが見られた。

B10 近代（大正期）の童謡について学ぶ：滝廉太郎と山田耕筰

専攻演習Ⅱ A では「童謡・唱歌」について取り上げ、ここでは童謡や唱歌の定義、童謡や唱歌誕生の歴史など、童謡や唱歌のいわば導入的な内容として実施した。この流れを受けて専攻演習Ⅱ B では、専攻演習Ⅱ A の内容に比して、日本を代表する日本歌曲の作曲家や作詞家について理解を深めるといふ、より発展的な内容として扱った。

日本の童謡史上に名を遺した人物として、作詞家の北原白秋（前出）と作曲家の山田耕筰（前出）が挙げられる。この二人については、既に専攻演習Ⅱ A で「この道」を鑑賞教材として扱っている。しかし、この時は紙媒体による通信教育での授業であったため、今回の面接授業で再度取り上げることにより、更に掘り下げて学習することとした。

授業は日本の童謡史について動画を視聴させ、そこに補足的な説明を挟むことで、あまりなじみのない童謡史についての理解を促した。

ワークシートの記述には、「作曲家の生涯について知り、童謡を大切にしたいと思う」「保育者になったら童謡をたくさん歌いたい」など、保育者としての自覚がみられた。これらの回答により、日本の伝統を大切にしようとする心情がいくらかでも育まれたことがうかがえた。

B11 西洋音楽史における著名な作曲家について学ぶ：バイエルなど

専攻演習Ⅰ A では、クラシック音楽における著名な作曲家としてモーツァルト（前出）を取

り上げた。そこから派生させて、今回は学生がさらに身近に感じる作曲家として、フェルナンド・バイエル（Ferdinand Beyer, 1806～1863）を取り上げることとした。本学では「ピアノ実技」において「大学ピアノ教本」を採用しているが、これは保育者をめざす学生用にピアノの教則本「バイエル」等から抜粋し編集されたものである。学生たちは、普段の授業でバイエルの練習曲に触れてはいるが、保育者になるに際してなぜこの曲集を弾かなければならないのかという問題に対して、その必要性を理解し学習意欲の向上につなげることが、ここでのひとつの狙いである。

バイエルの生涯について入門的な内容を持つ書誌を読ませた。ここでは、多くの作曲家が登場するため、学生たちは作曲家の名前探しをしながら楽しく読み進めていた。また、この本にはバイエルがどのような経緯でバイエル教則本を出版したかのかについて書かれているが、この点について学生たちは、友達と相談しながら作曲家探しをしたり、自ら検索をして作曲家について調べる姿が確認できたことで、学習を進展させることができている様子が認められた。

これらの授業の様子から、バイエルについて知るといふ作業に留まらず、音楽そのものに対して、より深い興味や関心を持てたのではないかと考えられる。また、バイエルは教則本の題名として知られているものの、もともとは人名である。この事実を知らなかった学生が多かったようだが、このように些末とも思われるひとつの知識であっても、それがひとつの関心を喚起する材料になったものと思われ、ひいては専攻科が履修している「ピアノ実技」の学習意欲向上にもつながったと考えられる。

(3) 五十嵐元子担当回

B4 「モラル・ジレンマ～道徳性の発達を知る」

ローレンス・コールバーグ（Lawrence Kohlberg:1927～1987）は「道徳性の発達段階」を提唱したアメリカの心理学者である。発達心理学の巨匠と呼ばれるジャン・ピアジェ（Jean Piaget:1896～1980）の考え方に大きな影響を受け、認知発達の段階に則した道徳性の発達の道筋を理論化した。それを検証するための課題のひとつに「モラル・ジレンマ」というものがあ

る。モラル・ジレンマとは、ある問題に対して、どのような解決方法と結果を選んでも、「どれが正しく」「何が正しいことなのか」に迷い、葛藤することを意味する。つまり、どれを取っても、良心の呵責に苛み、悩むような問題を指している。コールバーグは、このモラル・ジレンマに関する問題を作成し、そうした問題空間のなかで、人間が“どのような価値基準”を理由として、その解決方法と結果を選ぶのかを調査し、そこには発達段階があるということを明らかにした。

学生には実際に、コールバーグが使用したモラル・ジレンマの課題である“ハインツと妻の物語”を体験してもらった。“自分だったらどのような解決方法と結果を選ぶのか”、“その理由”もあわせて考えた後、周囲の仲間とも論議するように促した。

学生は、自分自身が選んだ解決方法と理由が、コールバーグの示した発達段階に従うと、現在の年齢段階よりも幼いということが示されたり、年齢相応であることを発見したりなど、教員が思った以上に、課題の内容に共感しながら、自分なりの回答を導き出していたようだった。なかでも、興味深かったのは「仲間と協力して、ハインツと妻が助かるように、動く」といった意見であった。

実は、コールバーグがこの実験調査を行ったとき、ほとんどの被検者が男性で、女性の被検者は数が少なかったと言われている。この調査に対して、キャロル・ギリガン (Carol Gilligan:1937-) は、道徳性の発達段階が男性(男児)を中心としたモデルであることを指摘し、女性(女児)の意見を聞いたところ、別の手段が提案されたという。それは、上記にある学生の「仲間と協力して、動く」と同様であった。

キャロル・ギリガンは、ジェンダーと結びついた倫理観を示し、「ケアの倫理」という著書を出版したことで有名な心理学者である。今回の授業では、モラル・ジレンマに対して、哲学的解釈(ベンサムとカント)やその他の調査を紹介しつつ、人は理性だけでなく、感情でも判断する生き物であると帰結した。しかしながら、学生からジェンダーとの結びつきに関する意見があがったことは、次年度以降の授業展開の有益な材料になろう。なぜなら、ジェンダーと倫理といった観点から、モラル・ジレンマを取り

あげていくことで、学生の社会の見方・捉え方がより広がっていくのではないかという可能性が示されたためである。授業全体を振り返ると、教員と学生が学び合う授業になったと考える。

(4) 三島秀晃担当回

B2 「ソーシャルディスタンスを踏まえた身体表現～座ってできる、わらべ歌～」

新型コロナの影響から、教育実習、保育実習において実習園から、部分実習計画案、保育実習計画案をたてるにあたって、子ども同士が極力接触しなくてすむ遊びを計画してほしいという指導を受けた学生がいた。その様な状況に戸惑う学生もいたこと、授業の際も学生同士会話や、スキンシップを控えていた学校の授業の実態から、「ソーシャルディスタンスを踏まえた身体表現～座ってできる、わらべ歌～」を学生と実践できるようにした。

内容は、児童文化論で学んだわらべうた遊び「くまさんくまさん」を友だちと触れ合わずに楽しんで実践できる方法を伝え、実際に体験できるようにした。その後、「なべなべそこぬけ」では、どうすれば触れ合わずに楽しくできるかを学生に問いかけ、一緒に考え3から5歳児の年齢に応じた遊び方を学生の意見をもとに作りあげた。

実践をした後に、この遊びは「幼稚園教育要領解説」に記述されている「カリキュラムマネジメント」とどの様な関連性があるかを問い、学生に回答を求めた。

教員と学生が考えた一例を紹介する

「幼稚園教育要領解説 カリキュラムマネジメント」から

①「何ができるようになるか」→体を存分に動かす楽しさを知ることができる

②「何を学ぶか」→距離を保ちながら遊ぶ方法を考えることを楽しむことができる

③「どのように学ぶか」→自分とは違う表現をする人がいることを楽しみながら学ぶ

④「子供一人一人の発達をどのように支援するか」→遊びを実践する中でわかる発達段階に留意し、支援が必要な子に対して、声をかけたり、一緒に実践したりしながら楽しめるようにする

⑤「何が身についたか」→制限された環境においても、その状況を肯定的に考えようとする

力が身につく

⑥「実施するために何が必要か」→指導計画案が必要

授業の目的としては、「幼児が主体的に考え、遊びを展開していく方法」を指導したが、積極的かつ意欲的な授業態度から、「学生が主体的に、考え指導方法を生み出していく」結果となった。

IV. 考察 「2020年度『専攻演習ⅡA』『専攻演習ⅡB』の果たした役割と課題～科目担当者の対談から～

「専攻演習ⅠA」「専攻演習ⅡB」を振り返り、科目担当の3人で座談会を行った。各教員から出た意見を以下の通りである。

1) 永井理恵子

・前期はコロナ禍の影響により面接授業ができなかったが、このような状況下であっても良い勉強ができた。

・土川五郎や石井十次など、夫々の分野で有名な人物であるが、授業では名前を習うくらいに留まってしまう。他の授業ではなかなか学習する機会がない人物について、単独で取り上げることができたことは有意義であった。

・フレーベルについて、深く学習する機会となった。

・学生のレスポンスシートから学習の状況を読み取ることができた。レスポンスシートには、マーカーを用いたり、また重要な箇所に線を引くなどの工夫が見られた。

・本学科は3年間で幼稚園教諭免許・保育士資格取得を目指す、3年制ならではの奥深いところまで知ってほしいと願っている。日本教育史に関しても、教員が想像している以上に学生が学んでいたことから、教員側の意向が学生に届いたものと考えられる。

・全体を通して、難しい内容であっても伝えることに意義があることがわかった。

2) 近藤万里子

・保育者としてどういう内容を理解し学んでもらうか、工夫が難しいと感じた。

・学生が自分と関係ないと感じないよう、理解しながら学べるような壁を取り払う工夫をしたが難しく、教員の力量が試されると感じた。

・特に哲学に関する授業は、生活の中で感じることや体験などから、哲学と生活との共通項からアプローチしたことで、中には理解できた学生がいたことが、レスポンスシートから読み取れた。

・文学に関する授業では、課題に挿絵を描くなど、学生自身が楽しんでいるようであった。しかし、想像力が足りず課題としてこなしている学生も多くいた。

・ソーシャルスキルトレーニングについての授業では対面授業を行い、学生の反応も見ながら授業を進めることができた。保育者としてだけでなく、学生の実態を捉えながら、学生自身が使えるソーシャルスキルを授業に取り入れた。

・学生の読解力不足から文章を読むことに抵抗があるようであった。これは少なからず幼少期の経験が影響しているものと思われる。

3) 若原真由子

・音楽への興味は、幼少期の経験が影響しているのではないかと考える。興味のある学生はより学習が深まる傾向にあった。

・学校教育では伝えられない、保育者として必要な音楽的知識を補うことができた。日本の音楽の発展について、時代背景を交えながらの説明を行ったが、音楽に壁を感じる学生にとっては、難しい授業であったと考える。しかし、一部の学生であったとしても、伝えることができ、意義のある授業であった。全ての学生へ伝えきることが課題であると感じた。

・「専攻演習ⅡA」「専攻演習ⅡB」は何れも専門性の高い授業であることから、「専攻演習Ⅲ」で卒業論文を執筆する際に、前記2教科の学習効果が表れることが期待される。または学生が就職をした後、保育現場で現れる可能性もある。このため、時空間を越えて世界観が広がっていくと思われる。

・この授業を論文として検討を行い、省察を行ったことがプラスに働いた。教員がその実りを確認できるものでありたい。

4) 座談会を終えて

座談会の内容から、学生にとって若干難しい内容であったが、他教科では学ぶことができない専門的な学習をすることができ、非常に意義のある授業を実施できていたことがわかる。

また、授業内容が難しかったにも関わらずレスポンスシートからは、教員が想像する以上に学生の学びが読み取れた。普段の学生の様子から、学生にとって高いハードルであると感じないよう、授業の水準を中間層の学生に設定しがちだが、多少難しい内容であっても、十分に学習効果が上がると考えられる。この授業でどれだけ学習効果が上がったかは、学生の学習状況を記したレスポンスシートから確認することができた。

(文責：若原)

V. おわりに

～「専攻演習」の今後に向けての提言～

本授業は、保育士免許・幼稚園教諭資格取得に必要な基礎知識を押さえた上での専門性の高い内容、そして一般教養としての学修を目的として開講された。学生の授業時の姿及び授業直後に得たレスポンスシートより、その目的の達成度と課題を明らかにしたが、本論を執筆している現在、新たな場面で本授業効果を見出すに至っている。

全30回の授業を終えた学生たちが一学年上がり次の段階の「専攻演習Ⅲ」において課題に取り組んでいる姿にこそ、この授業成果が如実に表れている。「専攻演習Ⅲ」では、それぞれが自分の興味関心に基づき、保育に関わる調査や研究を行う。本授業を学んだ学生は、これまでは見られなかった幅広いテーマを考え、学びを深めており、彼らの視野の広がりを感じる。これには本授業の影響が少なからず表れていると推測される。学びには直後に表れる成果もあれば、人生を通して表出される成果もある。本講義を受講した学生達が保育者となった時、授業で聞いた知識、見た映像、触れた教材、読んだ書物が想起され、何らかの形で彼らが保育する子ども達へと還元されていくことを願う。

直ぐに表出される結果のみに囚われず、こうした学びを提供していくことは学生の世界観を広げる意義深いことであろう。今後もこの省察を活かし、「専攻演習」として継続して実践していきたいと考える。

(文責：近藤)

【文献】

- 1) 帝京短期大学『教育研究報告集』No.7 2021 pp.25~40 所収
若原真由子他「コロナ禍における保育者養成課程の遠隔授業の取り組み」
- 2) 社会福祉法人 日本保育協会『保育所における障害児やいわゆる「気になる子」等の受入れ実態、障害児保育等のその支援内容、居宅訪問型保育の利用実態に関する調査研究報告書全文』「第4章 調査結果のまとめ」2015 pp.3~4 所収

A Report on” Course Exercises II”in 2020 At Department of Early Childhood Education, Teikyo Junior College

**Rieko NAGAI • Mariko KONDO • Mayuko WAKAHARA
Motoko IGARASHI • Hideaki MISHIMA**

Department of Early Childhood Education, Teikyo Junior College

【abstract】

【Purpose】 This article on the new subject in 2020 clarify about the results by showing purpose and contents. The new subject started in 2020 to deepen students’ knowledge as kindergarten teachers. This class was taught by three teachers and two temporary ones. They taught their professional knowledge to students. Those 5 teachers were the specialists for History of Education in Japan, Special Need Education, Music Education, Developmental Psychology, and Kindergarten Education.

These subjects were constructed by 30 classes (15 classes in each semester). The half of the whole classes contained the high advanced knowledge. The rest of half were constructed by the new knowledge which adjoined the teaching profession course. This subject, needless to say, includes not only the contents of the teaching profession course but also the high advanced knowledge. As we mentioned at the beginning of this abstract, this subject has just started in 2020, we tried to make clear about the outcome of this subject in this report by looking back all of this program.

【Methods】 Using the reflection paper written by students, we looked back about this program. In addition to this, we referred the document of the classes made by teachers. Each teacher looked back classes which they handled themselves and described their outcome and improvement points.

【Results】 It was difficult to confirm about the outcome of this program in 2020. However, we could make clear of the outcome in 2021. The students who attended those lectures are writing papers in 2021. In this process, we could check of the outcome those “Course Exercises”. Each student chose the theme of paper as a basis of this program. It was not easy to prove the learning outcome of “Course Exercises” at that time, but we can find the outcome later.

【Discussion/Conclusion】 We found the learning achievement on this new subject by checking the student reports. Students enjoyed to study about more advanced knowledge. Thorough the 30 classes, half of them functioned to support the contents of the teaching profession course very well. It is a little bit difficult to study for some students of course, but most of students enjoyed to get the professional knowledge in those classes finally. We could check about this results in their report and the achievement in 2021. The students studied more than the teachers expected a lot. We should create the classes more significantly to reply students’ request and we should find the method which all of students could study more effectively and easily with fun.

【Key words】 Advanced knowledge as kindergarten teachers, new subject, learning achievement